

いのちの水

二〇一六年

十一月号

六六九号

どうか神があなたの方に英知と啓示の霊を与え、あなた方の心の目を開いてくださるように。(エペソ書1の17、18より)

目次

・秋の日	1
・すべてを理解する人	1
・復活の希望	3
・死の力にうち勝つもの	10
― 詩篇49篇7	9
・主の導き	8
― 藤井美代子	8
・編集だより	8
・お知らせ	8
・集案案内	8



秋の日

木々の葉は色づき、美しい紅葉、黄葉、あるいは褐色となり、今年のはたらきを終えようとしている。

一部の草木には、枯れたようになる冬の近づくにあたって、それまでになかった新たな美しさを与えられているものもある。

緑の常緑の木々のなかに時折真つ赤にいろづいたヤマハゼやカエデ、あるいは黄色く染まったイチヨウ、イヌビワ、ヤマノイモ等々の葉もある。

それらを静かに見入るとき、音なくして交響楽が奏でられているのを感じる。それは神の奏でる音楽である。

そのような特別な色鮮やかな木々を見ると、思いたすことがある。それは、一日を

私たちのために光とエネルギーを与え続けて、太陽が西に沈むとき、周囲の天空や雲をさまざまの彩りで輝かせつつ、かつ自らも赤く輝かしい姿を見せつつ沈んでいく太陽のことである。

終わるときが近づいてもなおも輝く―私たちの人生もそのようでありたいと願う。

キリストは、その人生の最後は十字架での処刑だった。そこには釘づけにされ、激しい痛みと苦しみのさいなまれつつ死んでいく状況があった。そこに何らの美しさはなかった。恐ろしい光景だった。

しかし、その十字架は、霊的に見るときには、じつに輝かしい最後だった。永遠に輝く真つ赤な太陽―魂の目でしか見えないその光を輝かせつつ、地上の命を終えられた。

その輝きによって、以後二千年、無数の人間の魂が照らされ、救いを与えられてきた。私もその一人だった。

これからも、そのキリストの光によって心の闇をかかえる人たちが照らされ、魂の平和が与えられるようにとねがってやまない。

すべてを理解する人
―旧約聖書の格言集(箴言)の中から

多くの国々で残されている格言は、人生の真理を短い言葉で表したものである。聖書全体が、人生の真理が詰め込まれた書であり、到る所に、そうした真理が見いだされる。その聖書のなかでも、とくにそうした格言をまとめて集めたものがあり、それは箴言というタイトルとなっている。

ここでは、その箴言のなかから、ごく一部をとりだしてみたい。

主を尋ね求める人々は、すべてを理解する。(箴言28の5)

このひと言は、箴言の全体の要約ともなっている。主とは、万物を創造し、かつ現在もそれを維持し、支えている神である。身近な大空や星々、雲の動き、また天気の移り変わり、無数の植物や動物たち、昆虫などなど、一切を創造するということ無限の英知ある御方であるゆえ、そのような主を尋ね求めることは、そのような神の英知を尋ね求めるがゆえに、さまざまのことも深く理解する道へと導かれる。すべてこれ、その人にとつてとくに靈的に必要なすべてということである。

この箴言の言葉は、後の新約聖書のヨハネ福音書に記されている次の言葉に通じる内容となっている。

父(神)が遣わされる聖霊は、あなた方にすべてのことを教える。(ヨハネ福音書14の26)

主イエスは、「求めよ、そうすれば与えられる」と約束されたが、ここで与えられると言われているものはさまざまの内容を含むが、究極的にだれにでも与えられると言われているのが、人間の魂をもつとも深いところで満たす真理、カールそれら一切を含む聖霊のことを指している。(ルカ11の9-13)

そのように教えられる状態と対照的なのが、愚かということである。

愚かとは一般的には、頭の働きの鈍い者、判断力に欠けている者を言う。

しかし、聖書では、一番の愚かものは、自分を賢いと思いついでいる人だ。神は宇宙全部のことを知っておられる。過去、未来、人間のことも、すべてを。人間がどんなに賢くても、神の無限の英知と比較すれば、どんな人もみな愚かだということになる。

人は、いかなる学者であり、人生経験豊かな人であっても、明日のこともわからない。す

ぐ隣の人の心もわからない。自分がいかに罪深いものであるかさえもごくわずかしかわかっていない。

そうした小さいを考えるとすぐにわかるが、人間の英知、学問などは、神の無限の英知に比べれば無に等しい。

それにもかかわらず、自分を賢いと自惚れているものこそ、愚かだと言われている。

自分を賢い者だと思いついでいる者を見たか。彼よりは愚か者と言われている人のほうがまだ希望が持てる。(箴言26の12)

怠ける者は自分を賢い者だと思いついで。(同16)

怠ける者、知的に怠けると、私たちはこの無限の神秘の世界のことをよく見つめることもしないで、ほんのわずか何かを知っているだけで自分を賢い者、優れたものだと思いついで。

心の目を開き、しずかな細き語りかけに魂の耳を閉ざすよ

うな「怠け」心は、傲慢という愚かさへの道である。

自分のそうした何も知らないのも同然な状況を思わないで、高ぶっているときには、他者をさばき、悪口という形で他者を見下すことになる。

箴言のなかには(26章など)、そうした人間の悪い言葉についても記されている部分がある。

かげ口を言うことは悪いことを起こしている。かげ口に乘ったら両方とも罪に落ちる。かげ口は聴いた人の心に入り込み、その人がまた他にも言う。聴いたことが本当かどうかわからないのに、聴いた人の心に入り込んでしまう。かげ口は悪い食べ物である。

しかし、神さまの言葉はよい食べ物である。

よいことを言っても、心で悪意を持つ。上品そうに言っても、心が濁っている場合もある。

そうした悪いことを言う人は、自分がその穴に落ちる。

信頼されなくなる。悪いことをしていたら、自分がその穴におちる。それが、神の裁きである。

誰かについて何かを言うときは祈りが伴わねばならない。人間の口から出る言葉は人を汚す、とイエスさまも言われた。主と結びついていればそのようなことは起こらない。書12章14には「迫害する(自分に悪いことをしかけてくるような)人にも、悪口を返すのでなく、祝福を祈れ」と言われている。

…罪をつねに犯してしまいう人間のことに心を燃やすな。日毎に、主を畏れることに心を燃やせ。(箴言23の17)

私たちは、子供から老年の者まで、幾つになっても、他者の言ったこと、したこと、している心と心を悩ませることが多い。子供であっても、そうした悪しき言葉によっていじめをうけ、絶えがたい状態と

なってみずから命を断つほどの状況になる場合もある。

私たちが心すべきは、人間が何を言ったか、ではなく、神が何を私たちに語りかけているのか、ということなのである。

心を燃やすべきは、神を畏れ敬うことー言い換えれば、神の言葉に対してであり、神への愛やその真実、その力等々に関してなのだと言われている。

…人の心には、多くの計画がある。しかし、主の御旨のみが実現する。(19の21)

人間は明日のこと、すぐなりの人の心さえ、見通すこともできないほど無力である。そのような無力な人間がどんなに緻密に計画を立てようとも、それは思いがけない出来事によって中断され、あるいはまったく壊れてしまう。神が万事を私たちの計画や希望などの背後で見つめ、それ

をその御計画にしたがって導かれていくからである。

ここに希望がある。愛と真実に満ちた神、全能の神のご意志だけが実現していくのだ、との確信は、どのような時代にあっても、「主の平安」(ヨハネ福音書14の27)を与えられてきた。

これからも、いかなる状況になろうとも、その真理は変わらない。

復活の希望

(これは今年11月6日の午後、徳島市の眉山にあるキリスト教霊園での教会の合同記念礼拝にて語ったことに補筆したもの)

すでに亡くなった人々に対してする言葉として、キリスト教では「記念する」と言うが、仏教などでは、慰霊とか鎮魂という言葉がよく用いられる。慰霊という言葉は、霊を慰めるということで、死んだ人の霊が嘆いている、苦しんでいるということからその言葉がある。死者の霊が喜んでいる

ということなら、慰めるということは無用のことだからである。

さらに、鎮魂という言葉は、魂を鎮めるのであり、これは単に静かにするといった意味とはまったく異なる。鎮とは、金偏であり、金属の重しを置く、という意味である。それゆえ、鎮火、鎮庄、鎮痛などとして使われる。これらはみな、おさえておく、ということとである。死後の魂、霊も、そのままでは、悪いことをする、たたつてくる、ということとで、押さえておくという意味である。

…のように、鎮魂も慰霊もいずれも、死者の魂は、泣いている、嘆いている、苦しんでいる、怒り荒れているというような状態だとされているからこそ、そのような魂を重しでしずかにさせ、あるいは彼らの霊を慰めて、怒りや恨みをなくそうとするーという意味がある。

しかし、キリスト教では、信じた者は、キリストと同じ姿

と変えられる。生きている内から徐々に変えられていき、復活のおりには、キリストと同じ栄光の姿にしてくださいという驚くべきことが記されている。

：わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。

(コリント3の18)

そして、私たちは復活のときには、この弱く小さなものには、この弱く小さなものには、すぎないにもかかわらず、キリストの力を受けて、悪の力をも支配下におくほどの力を与えられるということが約束されている。

地上にあるときから、キリストを信じることによってさまざまのこの世の闇の力に引き回されなくなり、神さまの真実を信じ続けることができる。

このことは、キリストとともに、自分の内に働こうとする悪の力がある程度は支配する

ことができているのを示している。それが次の聖書の言葉である。

：耐え忍ぶなら、キリストと共に支配するようになる。

(テモテ2の12)

そしてパウロは、このことをさらに、深く啓示されて次のようにも記している。なんと私たちがキリストを信じることによって、死せる状態からの復活であり、キリストとともに天の王座に着かせてくださったというのである。王座に着かせてくださるだろう、といった推測でなく、過去形で書いてある。

：罪のために死んでいた私たちを、キリストとともに生かし、キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださった。

(エペソ書2の6)

ローマにおいて最初にキリスト者となった人たちのなかに、奴隷も多かった。そのような

人たちは、つねに所有者の命令通りに動かねばならない。

そしてカネで売り買いされ、家族もばらばらになってしまふことも多かった。

そのように、権力やカネの力でほんろつされている状況の人たちにとって、自分たちはキリストを信じるだけで、神様やキリストだけがおられるはずの天の王座に着かせてくださるといのは何という驚くべきメッセージ、信じがたいことであつたらう。しかし、聖書は最も真実な書であり、主から与えられた真実をもつて書かれた書である。そのよくな聖書に嘘が書いてあるはずはない。そういう思いから、このような聖書の言葉をそのままに信じた。それによって神から祝福され、さらなる力を与えられていったと考えられる。

：わたしたちは、今は、鏡におぼろに映つたものを見ている。

だがそのときには、顔と顔を合わせて見るようになる。

わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはつきり知ることになる。(コリント13の12)

現在の私たちのあらゆる知識は、一時的、またごく一部のものにすぎない。神の愛やその力、その正義やさばき、死後のこと等々、それらについては、無限の神であるゆえに、私たちがわかつているのはほんのわずかである。

そのために、なぜ不正なもの、がばり、悲しむべき犯罪や病氣、事故、戦争等々が起こるのか、なぜ私たち一人一人のうちに、真実や愛がないのか、それらすべては、私たちの復活のときに明らかにする。

そして復活したキリストそのものである聖霊が与えられたとき、死後でなく、生きているうちから、私たちは真理に関わるすべてのことを教えら

れると記されている。

…父(神)が私の名によって遣わされる聖霊が、あなた方にすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

(ヨハネ福音書14の26)

復活、それは単に死んだらよみがえる、というだけでない。ヨハネによる福音書には、そのことがはっきりと記されている。

そこでは、永遠の命というところが一貫したテーマとなっている。その福音書の実質的な最後にも、「これらのことを記したのは、イエスを信じて永遠の命を得るためである」と記されている。

そして、次のようにも記されている。

…あなた方に真実を言う。(…)わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになつた方を信じる者は、永遠の命を得、ま

た、裁かれることなく、死から命へと移っている。

あなた方に真実を言う。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。

父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださつたからである。(ヨハネ5の25〜26)

(*)この原文は、アーメン(真実に)、アーメン(言う)、ヒューミン(あなた方に)であるゆえ、英訳では「tell you the truth」(NIV)。「all truth - tell you」(NAB)、新改訳では、「まことに、まことにあなた方に言う。」などと訳される。しかし、新共同訳では、「はっきり言う」と訳したが、この訳ではイエスが強調しているのが真理だという意味が感じられなくなる。子供が口をあまり開けずに小さな声で答えたら、教師が「はっきりいなさい」と言った場合、それは真理とは関係がない。この聖書の箇所は「あいまいに言うのではなくはっきり言う」という意味ではなく、真理を言うということである。

さらに、次のように言われて

いる。

…イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」(ヨハネ11の23〜27)

このように、世の終わりのときに復活することは知っているという、イエスはそれを訂正するように、信じたらすでにいま復活して与えられる命と同じ永遠の命が与えられているということを、アーメン(真実、真理)を繰り返して強調されている。

そしてこの福音書の最後の部

分にも、結論として、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(ヨハネ20の31)と記されている。

主のうちにこそ、命がある。み国めざして 主に生きよう。暗い死のかけ おおつとも、命、主にあり、ゆるがない。

(讚美歌21-196より)

天国にて、すでに死去した家族や友人と会えると言われる。それはその通りだが、そのような希望を持ってない人たちも多くいる。

それは、親しい人、会いたいと思う人などいない、という人たち。例えば、親からも捨てられ、信頼できる友人たちもいない。さらに、いじめを周囲から受けた、だれもかばってくれなかった、親にも相談

できなかったーそのような苦しみをもって世を去った人たちは、天国で会いたいと思う人はいないかも知れない。

しかし、復活のときには、主と同じような栄光の姿になるーという約束は万人にとってそれ以上はない祝福である。主と同じようになるなら、主の力、洞察なども同じように与えられる、とすれば、当然、復活させていただいた人たちとも会えるであろう。

そしてだれも会いたいという人はいない、というような場合でも、主と同じような姿としていただける、主の御前でそのようになれば、当然完全な祝福をうけるのであって、もはや満たされない孤独や悲しみもすべてなくなる。

死んだ後、いつかわからないが、キリストの再臨のときに復活させていただくーということも大きな希望となるが、いまのこの闇と混沌のなかで死んだようになっていた私たちに新たな命を与えて、復活

させ(すでに述べたエペソ書2の6)、いかなる闇にもかかわらず、そのような闇の力に打ち倒されずに前進していくこと、それが万人にとつてさらに直接的に重要なことである。そしてそのような新たな命を与えられた者は、もはや死ぬことはない、永遠の命を与えられているからだと言われている。

ヨハネによる福音書では、その最後に、これらのことを記したのは、イエスを神の子と信じて永遠の命を受けるためであるという。

永遠の命を受けるなら、福音書に記されているように、いま死んだ状態から生きる。そして死んでも死なないーと記されている。

つまり、死後は眠っていて、未来のある時期に復活する、と受けとれる箇所がある一方、いまずでに復活したといえるのであり(エペソ書2の1、6)、永遠の命を与えられたのだ、ということも明確に記

されている。そのような新たな力が与えられるなら、当然、未来に生じる幾多の艱難をも越えていく力が与えられるということになる。

キリストは、葬儀に行かせてくださいと、願った人に対して、死せるものは死せるものに任せよ、と言われた。本当にいのちを受けた者は、死に関してエネルギーをさくことではない。生きている人に対して注ぐべきであると言われたのである。

キリスト教では、慰霊とか鎮魂などということはない。記念する、という。

それではその記念する集りー記念会とは何か。それは故人を忍ぶ、ということに終わるのではない。それだけでは、力は必ずしも与えられない。

一つの家族であっても、故人とはうまく理解し合えなかった、愛しあうことができなかった、というようなことはいろいろとあるだろう。そのようなとき、故人を思いだして力

が与えられるだろうか。生前に不和や、差別的待遇をうけたとか、問題のあったこと、考えが違つて対立したこともあったことなど思いだすと、かえって心が滅入ることもなりかねない。

それゆえ、葬儀、毎年の記念礼拝などは、単に故人を思いだし、遺族を慰める、ということではなく、ことごとくまわるものでなく、死という厳しい現実を私たちの目の前にもちだして、私たちも必ず死が訪れること、そのために適切な霊的準備をするーそのことが大きな目的となる。そのために、死を前にしつつ、新たな力を与えられることが重要となる。

私たちの外なる人は日々古くなっていくが、内なる人は日々新たにされていく(コリント4の16)ーそのみ言葉のようちに、永遠の命、すなわち神が持つておられる命を受けて日々新たにされることを願い求め、御国に向つて歩む力を与えられることが目標となる。

死の力にうち勝つもの

— 詩篇49篇

この詩のはじめは次のよう
呼びかけから始まる。

：諸国の民やこれを聞け。

この世に住む者は皆、耳を傾
けよ。

一般的な詩からは見慣れない
意外な冒頭の言葉である。

これは、永遠の真理だからこ
そ、諸国の民よ聞けと、強い
調子で呼びかけているのであ
る。

この言葉通りに、3000年
近くも前の詩篇を無数の民が
聞いてきた。皆というのはお
金持ちも貧しい人もみんなそ
うだということ、念のため
3節で言っている。

真理というのにはある国の人だ
けとか、ある年齢、ある知能
の人だけでなく誰にでも当て
はまる。水素と酸素で水がで
きるのが誰にとっても当然で

あるように、精神の世界でも
そうである。

4～5節にある、知恵、英知、
格言というのは同じような言
葉を言い方を変えて言ってい
る。聖書で言う知恵、英知と
いうのは、神に関する永遠の
真理を知らされた魂の状態を
表している。(英語では
wisdom)

この詩の作者は民に対してに
聞けと言っているが、この人
自身も格言に耳を傾ける。本
当の真理に耳を傾けてないな
ら、他者にも真理を伝えるこ
とができない。

豎琴を奏でて謎を解く(5
節)とは、豎琴を奏でつつ、
人生の深い真理を究めるとい
うことである。永遠の真理に
関する洞察が、音楽を助けと
しつつ、深められてきたとい
うことである。

このようなところにも、聖書
の世界における音楽の重要性
をかいま見ることができ
る。讃美歌は、実際に音楽とも
に讃美することによって神の

真理が心に入ってくることに
多い。キリスト教の音楽は単
に楽しいだけでなく、神の言
葉が込められており、また曲
のほうも、神への愛と憧憬の
心から作られたものが多数を
占めているからである。(一
部にはその地域に伝わってい
る民族の音楽を用いることも
ある)

政治家であり、詩人、音楽家
であったダビデも同じような
ことがあった。(サムエル記
上16章・16)今から三千年ほ
ども前のことだけれど、音楽
とともに霊的な良きものが流
れてくるということがあった。
しかし、音楽といつてもどの
音楽もよいものではなく、暗
きへと引き入れようとする音
楽もある。そのような音楽に
心が奪われないように注意が
必要となる。

この詩の作者が直面していた
問題は災いのふりかかる日、
悪意に囲まれる日の具体的な
解決である。
この作者は深刻な経験をもつ

ていて、それをいかにして乗
り越えたのか。

古代から権力は財産力と結び
ついてきた。財宝や富の力は
直接武力に繋がる。財宝や何
らかの武力で、そのようなも
のがない人達に迫ってくる
というのは昔から今もある問
題である。富の力だけを見てい
たら、本当の助け、救いはわ
からない。

それを乗り越えるために、こ
の作者は人間の死という現実
と神の無限性を見た。
いくらお金があっても、死の
世界から誰も買戻すことは
できない。富や財宝には致命
的限界がある。お金や権力も
死を前にしては無力である。
このようなことを見抜くこと
が英知である。

さらに、それに続いて、閃光
のように、旧約聖書ではまだ
部分的にしか示されていないか
つたが、ほとんどの人が人間死
んだら終わりだと思っ
ている中で、神だけがわたしの魂を
死の力から買戻すことがで

きるといふ真理が啓示されこ
とを記している。(16節)

死から乗り越えて、愛の力で
死に打ち勝つ力があることを
こんなに昔から言われていた。

旧約聖書はまだ、死後の復活
ということはずかしか出て
こない。預言書のなかでは、

非常に長いイザヤ書だが、死
後のことが言われている箇所
はわずかである。

その一つは、次の箇所である。
神様の送られる露は光の露だ
と詩的な表現である。まだ復
活ということを知らなかつ

たときに、闇の中に稲光があ
るように、光を受けて、神様
は死んだ人の世界に命の光の
露を送るんだと、閃光のよう
に見ることができた。(イザ

ヤ書26の19)

そしてこうした記述は、後に
現れるキリストの復活と、キ
リストを信じる人たちの復活

という真理を預言するもの
になったのである。

死んだものを贖い取る、闇

の力から救いだしてくださる
力があるということが、示さ
れるかどうかは、すべての人
の人生を一変させるほどの重
要なことである。

どんな無学な人でも、死にか
かった人でもこれが分かつた
ら、死さえも喜びになる。

この詩の作者は、死という現
実を思ったら、権力者も富も
何も力がないということが冷
静に分かり、さらに積極的な
意味で、闇の力から救い出し

てくれる力があるということ
も、神からの啓示によつて示
された。

神を見つめるとどんな難問も
解けていく。現実を見るとだ
んだんと追い詰められていく
が、そこから打ち勝つ英知を
与えられ、死の力すらも打ち

勝つ力も与えられ、悪意をも
乗り越えて勝利していった。

「このような真理の永遠的な力
を知らされたゆえに、この詩

は冒頭から、「諸国の民よ、
聞け」と言われているのであ

り、その呼びかけは、今日に
至るまで続いている。

主の導き 藤井美代子

11月18日の朝、私たちのキリ
スト集会員で、共に歩みを続
けてこられた藤井美代子姉が

みもとに召されました。
以下の文は、2012年の春
のイースター特別集会でなさ

れた感話です。

私は穴吹の出身です。

キリスト教に触れたのは子供
の頃、近所のクリスチャン
の方がおられ、クリスマスに

は、よく招かれて参加してお
りました。親族で唯一人のク
リスチャンの叔母の導きもあつ

たことも、その一因だったと
思います。母が50歳の若さ
で他界し、続いて私も体調を

崩し入院いたしました。
その時、叔母がみ言葉を送つ
てくれました。「彼らは涙の

谷をすぐれども、そこを多く

の泉ある所となす」 文語訳、
詩篇84章7節です。

この、みことばが今も私の心
に深く刻まれて印象深く、忘
れることができません。

穴吹集會、脇町教會へ参加し
導かれました。私の母教會は
脇町教會です。

牛島出身の主人と49年前の
イースターに結婚し鴨島での
信仰生活を続けておりました

が神様の意に反し年月は重ね
つつも、なまぬるい信仰生
活だったと反省しております。

問題のある中、今後どの様な
道があるかと祈りつつ生活し
ておりましたが徳島聖書キリ

スト集會に、お導きを受け、
現在に至っております。

初めて参加させて頂いた昨年
(2011年)の6月第2主
日礼拝の吉村さんのお勧めの

中に「わたしは決してあなた
から離れず、決して置き去り
にはしない」(ヘブル書13

章5節)のお導きで神様は私
のことを見捨てず、ご計画の

中に入れて下さっていると、言うことが、はっきり示され感謝で一杯です。

薄れつつある昔の良き時代の人々への思いやり優しさあふれる皆さまのお仲間に入れて下さいましたこと本当に嬉しく思います。

今後とも、よろしくお導き下さいませお願いいたします。ありがとうございます。

○藤井 美代子さんの愛唱讃美歌より。多くありますがここにはその一部をあげておきます。

「いつくしみ深き」 讃美歌 312

「人生の海の嵐に」 新聖歌 248

「主が私の手を」 新聖歌 474

「み恵み深き御神よ」

新聖歌 415

とくに「人生の海の嵐に」は、死の近づいたとき、声も出なくなるときでも、私どもが枕元で歌いますと、ずっと歌詞も覚えておられたようで、口が歌詞のとおりに

動いていました。いままでの生涯のなかで経験した数々の嵐のたびに、魂の港であるイエスさまのもとで、平安を与えられてきた魂の姿を深く感じたことでした。

○美代子姉が心に残っている聖句より

主「自身がこう言われる。

「わたしは決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにほしはない。」

(新約聖書 ヘブライ人への手紙 13章5節より)

藤井美代子姉に関しては、自宅療養のときから、一般的な治療を行なう病院に頼らず、さまざまの治療をみずから労力をいとわず、力を尽くして続けられたご夫君、藤井文明兄の姿も私たちの心に強く残されたことでした。

編集だより

○今月号は、執筆する時間がどうしてもとれずに、発行が二週間遅れ、さらに内容も少

なくなりまして。それは11月9日〜17日まで、九州、中国地方のいくつかの集会にてみ言葉を語るために出向いていたこと、その他の事情もありました。若き日のように、夜中の二時、三時までかかっても仕上げるということができなくなってはかどらないということもあります。

来信から

…健康状態が十分でなく、遠くの集会に参加できなくなつたが、インターネットのスカイプによつて私たちの主日礼拝に参加されるようになった方からの来信です。パソコンがなくとも、スマートフォンによつても、スカイプによつてもに集会に参加できます。こうした手段は以前では考えられなかったことです。

・参加者全員が自宅にいて、インターネットのスカイプで集会をする集りに参加して、関東や九州、四国の人々のお

声を聞いて、特別な感動がわき上がってきました。

参加した各地からの16人の人々が、遠く離れたそれぞれの場所で、心を一つにして、み言葉に耳を傾け、その語られるメッセージの中に、皆が一緒に神様の愛を感じたような不思議な感覚に捕らわれました。

9月に初めて、スマートフォンを用い、スカイプを通して徳島聖書キリスト集会の主日礼拝に参加したことです。スマートフォンから、集会のはじめのオルガン伴奏の音が流れだしたとき、同時に私の目から涙が流れだしました。

このように、実際にスカイプで遠く離れたところでの主日礼拝からの音が聞こえるようになれるまでに、何人かの兄弟姉妹に大変お世話になったのです。大阪のNさん宅で、Nさんが、徳島のSさんに電話して長時間、スカイプで通話できるようテストを繰り返しました。

スマホ相手のスカイプはSさんたちも初めてのようでした。私は何度もあきらめかけましたが、Nさんの決してあきらめない真剣な態度に驚きと感謝をもって続けることができました。さらに、別の日には、徳島のNYさんが練習につきあってくださいました。NYさんも根気よく説明を繰り返し、私の操作を忍耐強く待ってくださいました。このときは、*ヨコ*の仕方や、画面の換え方^{など}、実際に礼拝に参加するときの注意点などもいろいろ教えてくださいました。

体力が弱り、以前集っていた集会所までいけなくなつた私が、自宅にいながら主日の礼拝に参加できるように、みなさんが惜しみなく時間と知識を与えてくださいましたこと、心から主に感謝します

お知らせ

○全国集會記録集

5月に徳島で行なわれた、第30回キリスト教(無教会)全国集會の記録集ができたので、希望の方にお送りできます。参加者、参加予定で会費を納入された方々などには、「いのちの水」誌とともに同封してお届けします。内容の大部分はすでに、「いのちの水」誌の5月号以降に順次掲載してきたものです。写真はもとも入れる予定もなく、そのために全国集會では写真係もおかなかったのですが、一部スナップ写真といふべきものが撮られていたのでそれを入れて、不参加の方々に全国集會の雰囲気も少しも伝わるようにと少数入れてあります。写真を撮るために従来は時間を多くとられ、分科会を中断して撮影が個別の分科会ことになされ、またその担当者は、撮影のためのかなりの時間は、集會に参加できなくなるというマイナスがあるために、写真はとらないという方針でした。

記録集作成になかなか時間がとれず、いろいろ不十分なものとなりましたが、主がそのようなものをも福音のために用いてくださるようにとねがっています。

希望者は、一冊500円(送料込)です。申込は、「いのちの水」誌奥付に記してある吉村孝雄宛て、メール、電話、FAX、ハガキなどでお申し込みください。代金は郵便振替(これも番書は奥付にあります)、あるいは200円以内の少額切手でも結構です。

なお、録音は、ほとんどのプログラムについてMP3形式でなされてCDとしてすでに販売しています。多くの方々が申込ありましたが、現在でも希望者にお送りできます。全体の内容を収録しても、MP3形式でCDにすると、1枚で全部が入っています。また全国集會の賛美だけ、あるいは講話だけを収録したCDも別途作成していますので、これらのCDの希望者も、吉村まで申込んでください。このCDも一枚500円(送料込)です。

徳島聖書キリスト集會案内

- ・場所は、徳島市南田宮一丁目-1の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。
- (一) 主日礼拝 毎日 午前10時30分～
- (二) 夕拝 第一火曜と第三火曜 夜7時30分～
- (三) 夕拝 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のいのちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中山宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。
- ・水曜集會：第二水曜日午後一時から集會

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇二五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意) 郵便振替口座 〇一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送ってください。(これは、いずれも郵便局で扱っています) E-mail: pististy12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集會」)